

科 目 名	教育学				
配 当 学 年	1年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	村田 政孝(非常勤講師)		単位認定責任者	村田 政孝	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	本授業では、教育理論や歴史、あるいは現代の教育に係る諸課題について幅広く取り上げ、教育そのものについての基礎的な知識や思考の形式を獲得することを目指す。 また、毎時の授業においては、教育に係る報道に目を通し、特に強く関心を持ったことについて自らの意見をまとめることを求める中で、現代の教育課題への意識を高めることを目指す。 さらに、「教育とは？」という問いについて自ら考え、自ら答える態度を養うことをねらいとして、講義内容と関連するテーマについて、異なる小グループによるディスカッションを行うことを通して、自らの考えをまとめて述べる表現力の育成を目指す。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1.教育学に関する基礎的概念について説明できる。 2.教育理論について、それぞれの意義や特徴を具体的に述べることができる。 3.教育理論を用いて、現代の教育課題における教育学的側面を分析することができる。 4.教育学的側面の思考を用いて、教育課題における思考・表現の違いを説明することができる。 5.教育に関する基礎的概念や一般理解を用いて、自らの思考を確立し具体的に述べることができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	25%	定期試験		
	専門知識	25%	定期試験		
	倫理観	%			
	主体性	15%	毎時間の「シート」への取組並びにディスカッションへの参加意欲		
	論理性	35%	レポート等による論理的な記述力		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	%			
	責任感	%			
授業の展開					
1.	はじめに(ガイダンス、それぞれの教育の「原風景」を振り返る)				
2.	教育の意義と目的				
3.	人間が「育つ」ということ				
4.	「教え方」を探求した人々				
5.	教育への権利				
6.	学びを支える仕組み				
7.	子どものための学校				
8.	学校で学ぶこと				
9.	良い教師とは				

10.	日本の教員養成制度の歩み				
11.	教師と子どもとの教育的関係性				
12.	子どもの理解の枠組み				
13.	子ども理解とカリキュラム				
14.	社会教育と生涯学習				
15.	まとめ～教育とは？～				
授業外学修について		①事前学修:授業資料を熟読するとともに、関心を持った教育関連の報道に係る意見をまとめ、授業での発表に備える。 ②事後学修:毎時の授業の最後に課せられる「振り返りシート」に取り組み、自らの課題意識を鮮明にするとともに、当該授業の資料を再読し、授業で学んだ専門用語や知識を整理・定着する。 ③レポート作成:必要に応じて、課題についての情報を収集するなどして、与えられた課題について深く思考し、自らの意見を論理的に表現するよう努める。			
教科書		授業中に適宜資料を配付する。(次時の資料を配付することを原則とする)			
参考文献		①「教育の原理を学ぶ」(2015) 遠藤克也・山崎真之(川島書店) ②「問いからはじめる教育学」(2015) 勝野正章・庄井良信(有斐閣ストゥディア) ③「やさしい教育原理(第3版)」(2016) 田嶋一・中野新之祐・福田須美子・狩野浩二(有斐閣アルマ)等			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	×	○	×	○
成績評価の割合	50%	0%	35%	0%	15%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	◎成績評価の目安は、上記「成績評価の基準」によるが、「成績評価の割合」についての概要は、次の通りとする。 ①定期試験 ・範囲は講義の全範囲とする。 ・持ち込みは「不可」とする。 ②課題・レポート:7回目の講義で課題を示し、13回目の講義日を提出期限とするレポート課題を課す。 ・定められた期限内に提出すること。 ・適切な情報収集がなされており、自らの考えを論理的に述べているレポートであること。 ③取組状況等:出欠状況、振り返りシート(関心を持った報道、課題)、ディスカッションなどを観点とする。 ・「出欠状況」が良好であること。 ・「振り返りシート」への記述内容が整理されているとともに、確実に整理されていること。 ・「ディスカッション」への参加が、意欲的であること。				

(教育学)

科 目 名		教職概論				
配 当 学 年		1年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類		講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者		近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無		無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容		－				
授 業 科 目 の 概 要		学校教育や教職(教師の立場・責務及び役割)の内容を説明し、グループワークを取り入れ、教育の動向を深く踏まえて、求められる教員の資質能力を理解する。 今日の学校教育や教職の社会的意義を学び、多忙化する教員の役割を学校内外でチームとして組織的に対応する考え方で俯瞰した学修を行う。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標		1. 「教師」とは、どのような職業であるのかを理解し説明できる。 2. 資質能力を兼ね備えた教師として、教科専門力と生徒指導力を理解し身につけることができる。 3. 学校教育は組織で動くところであることを理解し、チームとしてコミュニケーションすることができる。 4. 今日的学校課題(いじめ、不登校など)について理解し、課題を解決する方策を述べることができる。 5. 様々な発表の機会により、プレゼンテーションスキルとコミュニケーションスキルを身に付けることができる				
学修成果評価項目(%)および評価方法		項目	割合	評価方法		
		基礎学力	15%	定期試験、小テスト		
		専門知識	25%	定期試験、小テスト、レポート、プレゼンテーション		
		倫理観	10%	定期試験		
		主体性	15%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
		論理性	5%	レポート		
		国際感覚	0%			
		協調性	5%	プレゼンテーション		
		創造力	15%	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
		責任感	10%	取組状況		
授業の展開						
1.	オリエンテーション, 学校教育の目的と意義					
2.	教職の社会的意義(教職の職業的特徴)					
3.	学校教育の目的(教職観の変遷といま求められる教員の役割)					
4.	教員の使命(教員に求められる資質能力)					
5.	教員の仕事(1)学級経営					
6.	教員の仕事(2)学習指導					
7.	教員の仕事(3)生徒指導・進路指導					
8.	教員の仕事(4)特別活動・職務の全体像					
9.	教員の勤務と職務(1)採用と任命					
10.	教員の勤務と職務(2)教育公務員の服務義務					

11.	教員の勤務と職務(3)身分上の義務及び身分保障				
12.	教員の研究と修養(1)教員研修の意義と学び続ける義務				
13.	教員の研究と修養(2)教員の指導力向上と課題解決				
14.	学校内外との連携(チーム学校、コミュニティ・スクール)				
15.	教師の資質能力を活かした学校改革、教職関連本のブックトーク				
授業外学修について	<授業外学修> ・授業理解のための予習課題を提示するので事前に調べておくこと ・復習として、授業プリントの下部にふり返り・感想を記入すること ・授業内容に係る小テストを数回実施するので復習しておくこと ・教育課題を提示するので、レポートにまとめたりプレゼンテーション資料を作成すること ・教職に関する本を1冊読み、冬期休業明けにレポート提出とプレゼンテーションを行うこと。				
教科書	・中学校・高等学校学習指導要領				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	○	○	○	○
成績評価の割合	40%	10%	20%	20%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【定期試験】 講義内容について、定期試験を行う。教科書等の持ち込みは不可。 【小テスト】 教育法規の内容等について、小テストを行う。 【レポート】 生徒指導に関する課題について、原因や対応策をグループでまとめ、レポートを提出する。また、冬季休業明けまでに教職に関する本を一冊読み、内容と感想のレポートを提出する。 【プレゼンテーション】 生徒指導に関する課題について、グループでプレゼンテーションを行う。また、冬季休業明けにブックトークを行う。 【取組状況】 課題の提出やふり返りと感想の記入、講義中に行う発問やグループ協議等への取組状況について、主体性と責任感を評価する。				

(教職概論)

科 目 名	教育経営論				
配 当 学 年	1年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	宮嶋 衛次(非常勤講師)		単位認定責任者	宮嶋 衛次	
実務経験の有無	有				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	教育経営について、学校現場での実態を取り入れながら講義を行う。				
授 業 科 目 の 概 要	社会状況の変化が学校教育に与える影響・課題、それに対応する教育政策の動向を学び、現代公教育の意義・原理・構造に関する知識を身に付け、課題を学ぶ。学校や教育行政機関の目的など学校経営の視点から理解し、更に学校と地域との連携や学校安全への対応に関してその事例などグループワークを取り入れて行う。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 教育法令を踏まえ、必要な知識や理解を深め、教育課題について適切に考え判断できる。 2. 新聞を活用し、教育問題への関心を高め、教育課題を把握できる。 3. 文部科学省等のWEBPAGEを閲覧することを習慣化し、教育情報を収集できる。 4. 具体的な事例に基づく意見交換をとoshi、問題解決能力を身につけることができる。 5. 教員候補者選考にも対応できる実践的な能力を身につけることができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	15%	定期試験、小テスト		
	専門知識	25%	定期試験、小テスト、レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	5%	定期試験		
	主体性	15%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	15%	定期試験、レポート		
	国際感覚	0%			
	協調性	5%	プレゼンテーション		
	創造力	15%	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
	責任感	5%	取組状況		
授業の展開					
1.	教育の制度の現況				
2.	公教育制度の原理・理念と教育基本法				
3.	教育行政の制度(1)教育行政制度と関連法規				
4.	教育行政の制度(2)学校管理の制度と教育行政の理念と仕組み				
5.	教育行政の制度(3)教育制度をめぐる諸課題、教職員の服務				
6.	学校経営(1)意義と組織・学校管理規則				
7.	学校経営(2)校務分掌と学校組織				
8.	学校経営(3)学校評価とマネジメント				
9.	学校経営(4)経営の仕組みと効果的な方法				
10.	学校経営(5)チーム学校				
11.	学校と地域の連携(1)教職員と学校内外の関係者・関係機関との連携・協働の在り方				
12.	学校と地域の連携(2)開かれた学校づくりとコミュニティースクール				

13.	学校安全への対応(1)学校保健安全と食育				
14.	学校安全への対応(2)学校事故・危機管理、生徒指導				
15.	教育行政上の課題と解決方策				
授業外学修について	(1)予習としては、前述の「授業の展開」で、その時間に学ぶ教育法規を確認し、後述の「参考文献」欄を参考に、事前に読んでおくこと。 (2)復習としては、演習問題のうち自分が誤答した問題について、なぜ誤答したのか、正答を導きだす判断の根拠は何なのかを、配布資料を参考に整理することが必要です。大切なのは、暗記ではなく、判断力、思考力を養うことです。				
教科書	使用しない。授業プリント及び演習問題を配付します。				
参考文献	(1) 総務省法令提供システムhttp://law.e-gov.go.jp (2) 文部科学省ホームページhttp://www.mext.go.jp (3) 北海道教育委員会ホームページhttp://www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/index.htm				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	○	○	○	○
成績評価の割合	40%	10%	20%	20%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【定期試験】 教育法規をはじめ、教育経営に関する問題を出題する定期試験を行う。参考書などの持ち込みは不可。 【小テスト】 教育法規の内容について、数回小テストを実施する。 【レポート】 講義内容について、数回レポートを課す。 【プレゼンテーション】 教育関連ニュースについてのプレゼンテーションを行う。 また、教育関連用語について、プレゼンテーションを行う。 【取組状況】 講義中に行う発問やグループ協議等への取組状況について、主体性と責任感を評価する。				

(教育経営論)

科 目 名	教育心理学				
配 当 学 年	2年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	瀧本 誓(非常勤講師)		単位認定責任者	瀧本 誓	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	-				
授業科目の概要	本講義では、その個性を育む「学び育つ場」(家庭、学校、地域)への心理学的理解と教育実践について議論する。発達や学習、パーソナリティ、教育評価、個人差といった心理学的過程の理解を深めることで考察を深化させ、教育問題に対する心理学的支援の提案を行うことを目的とする。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 「学び育つ場」における適切な教育支援を生涯発達の視点から提案できる。 2. 「学び育つ場」における適切な学習支援を行動・認知両側面から提案できる。 3. 「学び育つ場」における教育評価の目的に応じた適切な教育評価を提案できる。 4. 「学び育つ場」における個人差を考慮した適切な教育支援を提案できる。 5. 「学び育つ場」における合理的配慮に基づいた適切な心理教育的支援について提案できる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	20%	振り返り課題および定期試験等における論述内容		
	専門知識	20%	振り返り課題および定期試験等における論述内容		
	倫理観	%			
	主体性	20%	振り返り課題や質問等における自発的取り組みとその論述内容		
	論理性	20%	課題や発表、試験における考察や意見等とその論拠内容		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	20%	課題や試験等に示された教育場面への創造的提案とその論拠		
	責任感	%			
授業の展開					
1.	ガイダンス(シラバスによる授業内容の説明) 教育心理学とは何か 《振り返り課題1》				
2.	発達(1) 発達とはなにか? 心理学における生涯発達の捉え方				
3.	発達(2) 発達における心身の変化はどのように捉えられるのか? 発達への多様な視点の重要性				
4.	振り返りと補足① 学校における多様な発達(心身の変化)について考えてみよう 《振り返り課題2》				
5.	学習(1) どのようにものごとを覚えていくのか? 多様な学習理論:行動主義と認知主義				
6.	学習(2) どのように一人できるようになるのか? 学習理論の復習と状況に埋め込まれた学習という考え方				
7.	学習(3) 学びへやる気を支えるものはなにか? 学習への動機づけと自己調整学習				
8.	振り返りと補足② 学校におけるさまざまな学びについて考えてみよう 《振り返り課題3》				
9.	教育評価(1) 教育評価はなぜ、どのように行うのか? 教育評価の目的と方法の理解				
10.	教育評価(2) 教育評価における学力や知能の捉え方 学力や知能を理解した上での教育的支援の提案				
11.	振り返りと補足③ 適切な教育評価とはどのような評価か考えてみよう 《振り返り課題4》				
12.	個人差の理解(1) 発達障がいへの適切な支援とは? 学校におけるインクルーシブ教育と合理的配慮				

13.	個人差の理解(2) 適応とパーソナリティとの関係は？ パーソナリティの形成過程とパーソナリティの捉え方				
14.	個人差の理解(3) 学校におけるマイノリティという視点とは？ 多様なマイノリティへの配慮について考察				
15.	振り返りと補足④ 多様性に配慮した教育についてみんなで考えてみよう:授業における学習支援案				
授業外学修について		【課題】ノート作成を行い、それを参考に、振り返り課題に取り組むこと。 【復習】授業後にノートの確認および作成(疑問点について文献を調べノートを作成)。 【予習】授業前にシラバスで授業内容を確認し、文献で下調べを行い、ノートに要約。 ※口頭説明やノートテイキング、プリント等で特別な配慮が必要な方は予め相談してください。			
教科書		教科書は指定せず、毎回プリントを配布します。併せて、紹介する参考文献を読んでください。			
参考文献		中谷素之・平石賢二・高井次郎(編)(2024)学び・育ち・支えの心理学 名古屋大学出版会 桜井茂男(2024)ウェルビーイングをデザインする小中学生の非認知能力 図書文化社 杉村伸一郎(監修)・三宅英典(編著)(2023)あなたの経験とつながる教育心理学 ミネルヴァ書房 中谷素之・中山留美子・町 岳(2022)エピソードに学ぶ教育心理学 有斐閣 西岡加名恵ほか(編)(2022)新しい教育評価入門 増補版 有斐閣 三宮真智子(2018)メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 北大路書房 … その他随時紹介			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	×	○	×	○
成績評価の割合	50%	0%	40%	0%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				

試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	※ 出席カードへの振り返りや質問等で取組状況，振り返り課題や定期試験等の評価は，授業で示すルーブリック(評価の観点と評価規準の表)に従い評価します。評価の主な観点としては，基礎学力や専門知識，論理性を設定しています。自ら，問題点の把握や発見し，問題に対する考察を行い，根拠に基づく考察結果(結論)を述べているかどうかを評価します。考察を深めるために，まず図書館，さらにJ-Stage, Google Scholar等を活用して複数の資料を読みましょう。 ⇒ただし，プリントや文献の内容や図表等をそのまま書き写しただけでは，皆さんの理解度や考察の深さを評価することができません。適切な引用を行わず，文献や他の人の記述から書き写すことは剽窃(無断盗用)となります。剽窃は不可としますので，絶対に行わないようにしましょう。 ⇒文中には適切な引用(著者と作成年を記載)を行い，文末には著者名や作成者，発表・作成年，タイトル，出版社あるいは雑誌名と巻号と頁を記載した文献一覧を必ず示すようにしてください。試験だけでなく，すべての課題で，剽窃に留意しながら実行してください。 文献の引用等に関しては，日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の「3.7 引用・言及」の項を参照してください。 https://psych.or.jp/manual/manual05#3_7 ※ 多くの大学ではレポートの書き方に関する資料が公開されています。さらに，千歳科学技術大学の図書館に所蔵されているライティングや心理学に関連する図書がたくさんあります，さらには北海道地区大学図書館協議会相互利用サービスも利用しましょう。貴学の図書館から他大学の図書館も利用できます(便利！)。 ネット検索の前に図書館へGO！ 北海道大学 学習支援https://www.lib.hokudai.ac.jp/learning_and_teaching/learning_support/ 中央大学 ライティング・ラボ 資料https://sites.google.com/view/chuo-writinglab/textbook 立命館大学 剽窃行為は残念すぎてhttps://www.ritsumeit.ac.jp/file.jsp?id=481895 広島大学 レポート作成上の注意 https://home.hiroshima-u.ac.jp/akyah59/notice_rep_hu.pdf
-------------------------------	--

(教育心理学)

科 目 名	特別支援教育学				
配 当 学 年	1年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	佐藤 至英(非常勤講師)		単位認定責任者	佐藤 至英	
実務経験の有無	有				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	心理教育相談にて、臨床にかかわってきた経験をもとに、授業展開を行います。				
授業科目の概要	特別支援教育に関する歴史と制度を学び、様々な障害についての教育・心理的特性・指導法について概説する。教職課程の編成について、特別支援学校学習指導要領及び同解説(以下「解説」と表記)に基づき講義するとともに、個別の支援計画と個別の指導計画や特別支援教育コーディネーターなどについて、実践例を挙げて講義する。				
授業科目の到達目標	1. 特別教育支援に関する歴史と制度を学び、その基本的な考えを説明することができる。 2. 障害のある幼児、児童及び生徒の学習上の困難を理解し、適切な教育方法を説明することができる。 3. 個別の教育的ニーズを把握し、説明することができる。 4. 特別支援教育に必要な知識や支援方法を説明することができる。 5. 多様な障害種について、教育・心理的特性・指導法について説明することができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	30%	毎回の小テスト		
	専門知識	40%	レポート課題		
	倫理観	%			
	主体性	30%	レポート課題の取組状況		
	論理性	%			
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	%			
	責任感	%			
授業の展開					
1.	特別支援教育の歴史と背景				
2.	特別支援教育の制度				
3.	障害の概念(ICF:国際生活機能分類の概念)についての理解				
4.	視覚障害のある幼児、児童、生徒の心理・行動特性の基本的な理解				
5.	聴覚障害のある幼児、児童、生徒の心理・行動特性の基本的な理解				
6.	知的な障害のある幼児、児童、生徒の心身の発達・心理特性の理解				
7.	肢体不自由・病弱のある幼児、児童、生徒の心理・行動特性の基本的な理解				
8.	発達障害のある幼児、児童、生徒の心理・行動特性の基本的な理解				
9.	障害のある幼児、児童、生徒の学習上、生活上の困り感の基礎的な理解と支援例				
10.	自立活動の事例研究				
11.	校内体制(コーディネータ等)及び各関係機関との連携の理解と具体例				
12.	障害以外の特別な教育ニーズの理解及びインクルーシブ教育とユニバーサルデザイン教育の理解				

13.	通常学級における特別支援教育の意義の理解				
14.	個別の指導計画及び個別の教育支援計画についての理解(1)				
15.	個別の指導計画及び個別の教育支援計画についての理解(2)				
授業外学修について	【予習】 講義内容を確認し、講義内容について自学する。 【復習】 講義内容に係る参考文献で復習をする。 【課題】 レポートを課す。				
教科書	参考書は授業内に随時紹介する。 資料等の配布 授業の進行状況に合わせ、適宜資料を作成し、配布する。				
参考文献	特別支援学校学校指導要領及び同解説 授業の進行状況に合わせ、適宜資料を作成し、配布する。				
試験等の実施	定期試験	その他の テスト	課題・ レポート	発表・プレゼン テーション	取組状況等
	×	○	○	×	○
成績評価の割合	0%	30%	40%	0%	30%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【毎回の小テスト】 ・毎回の授業内容に関する、小テストを課す。 【レポート課題】 ・特別支援教育に関わる項目について、レポートを課す。 【成績評価】 ・講義時における小テスト、取組状況およびレポート提出状況を成績に加える。 ・再試験は、60点以上を「可」、59点以下を「不可」と評価する。ただし、追試験対象者は、定期試験と同じ評価基準で評価する。				

(特別支援教育学)

科 目 名	教育課程論				
配 当 学 年	2年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	学校教育の体系としてのカリキュラムと教育の目的・目標との関連、学習指導要領の意義や歴史的変遷とその法制、教育課程の編成・実施、教育内容と学力、学習指導要領の総則の内容、新学習指導要領の特色と取扱い、学校の特色づくりと教育課程、カリキュラム・マネジメントの意義・重要性和学校評価などについて学修する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 教育の目的・目標の具現化と教育課程の関連を説明できる。 2. 学習指導要領の意義や内容、その法制について説明できる。 3. 教育課程表からその編成・実施のねらいを理解し、その内容などを例示できる。 4. カリキュラム・マネジメントの意義や重要性を理解し、説明できる。 5. 学校の特色づくりとカリキュラム評価・学校評価の関連について説明できる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	15％	定期試験、小テスト		
	専門知識	25％	定期試験、小テスト、レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	％			
	主体性	15％	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	15％	定期試験、レポート		
	国際感覚	％			
	協調性	5％	プレゼンテーション		
	創造力	15％	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
	責任感	10％	レポート、取組状況		
授業の展開					
1.	ガイダンス、教育課程の意義				
2.	教育課程の基準と教育課程に関する法令				
3.	学習指導要領の変遷と学力に関する諸調査				
4.	総合的な学習の時間の変遷				
5.	学習指導要領の改訂と「社会に開かれた教育課程」				
6.	教育課程編成の基本				
7.	「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業				
8.	学習評価の意義				
9.	諸外国の教育課程				
10.	カリキュラム・マネジメントの意義				
11.	カリキュラム・マネジメントの方法				
12.	教育課程編成の実際				

13.	学級におけるカリキュラム・マネジメント				
14.	カリキュラムを支える教育環境・教育課程と評価				
15.	学校の特色づくりと教育課程				
授業外学修について		・授業理解のための予習課題に取り組むこと ・授業内容の定着を図るため、関連する情報を調べ復習をしておくこと ・レポート課題について情報を収集し、深く考察すること ・出身校の学校要覧や学校評価を活用し、教育課程に関する理解に努めること			
教科書		・高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説「総則編」			
参考文献		・各自出身高等学校の「学校要覧」と「学校評価」 ・中学校学習指導要領解説「総則編」			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	○	○	○	○
成績評価の割合	40%	10%	20%	20%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(教育課程論)

科 目 名		道徳教育指導論				
配 当 学 年		2年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類		講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者		杉浦 勉(非常勤講師)		単位認定責任者	杉浦 勉	
実務経験の有無		有				
実務経験のある教員名および授業の関連内容		小学校教諭の業務経験を基に、道徳教育の理論と実践的な指導に関して、実務に即した指導を行う。				
授 業 科 目 の 概 要		道徳教育とは、「人格の完成及び国民の育成の基盤となる」道徳性を育てることである。 そこで、中学校における道徳教育の現状と課題を検討し、生徒の人的発達・成長課題、「生き方」などを踏まえつつ、道徳教育の具体的指導の方法について、主に学習指導要領を読み解きながら基礎的知見を養う。また、道徳教育に関する教育学説、近代学校制度における歴史的特質なども検討する。それらを総合的に捉えたうえで具体的授業のプラン(指導案)を作成し、模擬授業を実践、状況によっては全員で指導案を検討する。そのためにも題材・資料・ねらいの深化が重要となり、その選択と授業参加者相互による批判・検討が特に重要となる。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標		1. 学校教育における道徳教育の位置・役割を構造的に把握することができる。 2. 「道徳とは」「道徳性とは」「道徳教育とは」を、主に学習指導要領を読み解きながら具体的に語り、関連づけることができる。 3. 道徳教育の目標を学習指導要領の変遷から読み取り、説明することができる。 4. 学年・学級における生徒の実態を分析し、道徳の「授業」で生徒の何を伸ばすのか考察することができる。 5. 道徳の「授業」を自分でデザインし、展開することができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法		項目	割合	評価方法		
		基礎学力	%			
		専門知識	%			
		倫理観	%			
		主体性	25%	レポート、グループワーク、学習姿勢・態度		
		論理性	35%	レポート、発表		
		国際感覚	%			
		協調性	15%	グループワーク		
		創造力	25%	レポート、発表		
		責任感	%			
授業の展開						
1.	ガイダンス及び学校教育における道徳教育の位置と役割					
2.	「道徳とは」を考える					
3.	道徳教育の歴史的変遷と現在及び諸外国における道徳教育(1)					
4.	道徳教育の歴史的変遷と現在及び諸外国における道徳教育(2)					
5.	道徳教育の目標と道徳科の目標に関する関連					
6.	道徳科の内容と指導計画作成上の配慮事項					
7.	道徳科の指導と指導の配慮事項					
8.	道徳科の教材に求められる内容の観点と道徳科の評価					

9.	指導案の作成(構想、書き方、留意事項など)と資料探し				
10.	個人または数人のグループで指導案を作成する(授業形態を見て、どちらにするか判断する)				
11.	個人または数人のグループで指導案を作成する				
12.	個人または数人のグループで指導案を作成する				
13.	完成した指導案を基に模擬授業または全体会で発表・相互講評する				
14.	完成した指導案を基に模擬授業または全体会で発表・相互講評する				
15.	まとめ—今までの授業を振り返り、教師と生徒と道徳教育の関係を再確認する				
授業外学修について	次回の授業内容を学生に伝え、予習を促す。復習は、授業で使用した資料・プリント類はファイルに托じて見直す。疑問、深めてほしい点などは次回の授業に発表してもらう。				
教科書	文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編 教育出版				
参考文献	自作テキストやプリントはその都度配布する。参考書については、授業中に提示する。				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	○
成績評価の割合	0%	0%	60%	25%	15%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	授業を進める中で、一部補足修正事項が出てきたら対応する。 成績評価の割合の「プレゼンテーション」には、小課題、授業内発表を含む。 成績評価の割合の「取組状況等」には、指導案作成を含む。				

(道徳教育指導論)

科 目 名	総合的な学習の時間の指導法				
配 当 学 年	2年	必修・選択	必修	CAP制	対象
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	各教科での学習や進路学習、学校行事等と連動させた取り組みを通じた、グループワークや集団討議等を適宜取り入れ、探究的な学びのデザイン手法や評価方法の習得と実践的な指導力を育成する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 総合的な学びの時間の意義を説明できる。 2. 総合的な学びの時間の指導計画に関する知識・技能を身に付ける。 3. 総合的な学びの時間の指導方法に関する知識・技能を身に付ける。 4. 総合的な学びの時間の評価に関する知識・技能を身に付ける。 5. 総合的な学びの時間の授業デザインができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	%			
	専門知識	70%	プレゼンテーション(15)・レポート(35)・その他テスト(20)		
	倫理観	10%	プレゼンテーション(5)・レポート(5)		
	主体性	%			
	論理性	10%	プレゼンテーション(5)・レポート(5)		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	10%	プレゼンテーション(5)・レポート(5)		
責任感	%				
授業の展開					
1.	総合的な学習の時間の意義について				
2.	学習指導要領と総合的な学習の時間				
3.	学校の教育目標と総合的な学習の時間				
4.	各教科等の学習と総合的な学習の時間				
5.	学校行事と総合的な学習の時間				
6.	進路学習と総合的な学習の時間				
7.	地域や学校の特色と総合的な学習の時間				
8.	総合的な学習の実践例1(問題解決型)				
9.	総合的な学習の実践例2(探究的な学び)				
10.	総合的な学習の時間の指導計画作成(年間計画)				
11.	総合的な学習の時間の指導計画作成(学校目標)				
12.	総合的な学習の時間の指導計画作成(年間計画)				
13.	総合的な学習の時間の指導計画の発表				

14.	総合的な学習の時間の指導計画の評価				
15.	まとめと振り返り				
授業外学修について	1. 授業理解のための予習課題を提示する 2. 授業の確認と定着を図る課題を提示する				
教科書	高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編(文部科学省)				
参考文献	授業時に適宜資料等を配付				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	○	○	○	×
成績評価の割合	0%	20%	50%	30%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(総合的な学習の時間の指導法)

科 目 名	特別活動指導論				
配 当 学 年	2年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	特別活動の意義、目標・内容、教育課程上の位置付けや各教科との関連や、「ホームルーム活動」、「生徒会活動」、「学校行事」のそれぞれの特質等について学修する。 特別活動の具体的な場面における指導の在り方について、グループワークや集団討論により理解を深め、課題に関する探究的な取組により実践的な指導力を育成する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 特別活動の意義、目標及び内容を説明できる。 2. 特別活動の教育課程上の位置付けや各教科との関連を説明できる。 3. 「ホームルーム活動」を理解し、実践的な指導の在り方を説明できる。 4. 「生徒会活動」を理解し、実践的な指導の在り方を説明できる。 5. 「学校行事」を理解し、実践的な指導の在り方を説明できる。				
学修成果評価項目（%）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	15%	定期試験、小テスト		
	専門知識	25%	定期テスト、小テスト、レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	%			
	主体性	15%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	15%	定期試験、レポート		
	国際感覚	%			
	協調性	5%	プレゼンテーション		
	創造力	15%	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
	責任感	10%	取組状況		
授業の展開					
1.	学校教育と特別活動				
2.	学校教育に位置付けられた特別活動の意義				
3.	特別活動の目標及び内容				
4.	特別活動における望ましい人間関係と集団				
5.	特別活動における「ホームルーム活動」の特質				
6.	特別活動の実際①「ホームルームづくりの指導」				
7.	特別活動の実際②「ホームルーム活動」				
8.	特別活動における「生徒会活動」の特質				
9.	特別活動における「学校行事」の特質				
10.	特別活動の実際(1)「儀式的行事の指導」特別活動の実際				
11.	特別活動の実際(2)「文化的行事の指導」、(3)「健康安全・体育的行事の指導」				
12.	特別活動の実際(4)「旅行・集団宿泊的行事の指導」				

13.	特別活動の実際(5)「勤労生産・奉仕的行事の指導」				
14.	特別活動の指導計画・評価・改善活動				
15.	特別活動の学校研究<学校要覧・学校評価>				
授業外学修について	・授業理解のための予習課題に取り組むこと ・授業内容の定着を図るため、関連する新聞記事や情報等を調べ復習しておくこと ・レポート課題について情報を収集し、深く考察すること ・出身校の「学校要覧」や「学校評価」を活用し、特別活動の意義、目標及び内容の理解に努めること				
教科書	・中学校学習指導要領解説「特別活動編」(平成29年7月 文部科学省) ・高等学校学習指導要領解説「特別活動編」(平成30年7月 文部科学省)				
参考文献	・出身校の「学校要覧」・「学校評価」 ・授業時に適宜資料等を配付				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	○	○	○	○
成績評価の割合	40%	10%	20%	20%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【その他のテスト】 小テストを数回行う 【課題・レポート】 授業内容に関する課題を数回課す 【発表・プレゼンテーション】 課題について探究的に取組み、発表を行う 【取組状況等】 授業時における質疑応答やグループ協議等への取組状況について、主体性や責任感を評価する				

(特別活動指導論)

科 目 名	教育方法論				
配 当 学 年	2年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	1 単位	授業回数	8
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	21世紀という変化の激しい時代を乗り越えるため、生徒は問題発見・解決能力の獲得が求められ、そのため学校には、「主体的・対話的な深い学び」に呼応した学習形態の積極的な導入が求められている。そのため、従来の一方通行型の授業形態のみならず、アクティブラーニング型の授業等が求められている。そのためICTの効果的な活用も求められている。eラーニングや遠隔授業等のインターネットを利用した学習方法、電子黒板やデジタルペンと言った学習デバイス、グラフィックスやアニメーションを使った学習コンテンツなど、ICT活用による授業の取り組みは、生徒の授業への興味関心を高め、学力向上につながることが期待されている。 この授業では、ICT活用や新しい授業形態等を俯瞰した授業デザインや指導法の方略を通じた、教育方法の概観の習得を図る。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 現代教育および教育方法の動向について説明できる 2. 様々な学習・授業形態の特徴について説明できる 3. 様々な学習・授業形態の指導法について説明できる 4. ICTを活用した学習・授業形態について説明できる 5. デジタル教材の意義および効果的な活用法について説明できる				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	％			
	専門知識	55％	レポート(50)・プレゼンテーション(5)		
	倫理観	15％	レポート(10)・プレゼンテーション(5)		
	主体性	10％	プレゼンテーション(10)		
	論理性	15％	レポート(10)・プレゼンテーション(5)		
	国際感覚	％			
	協調性	％			
	創造力	5％	プレゼンテーション(5)		
	責任感	％			
授業の展開					
1.	教育方法論の意義と目的				
2.	現代教育の動向				
3.	様々な授業形態(1) アクティブラーニング型授業				
4.	様々な授業形態(2) 反転学習				
5.	様々な授業形態(3) ICT活用型授業				

6.	様々な授業形態(4)				
	遠隔型授業				
7.	学びの未来				
8.	授業のまとめと振り返り				
9.					
10.					
11.					
12.					
13.					
14.					
15.					
授業外学修について		1. 配付された学習資料・補足資料を見直し、学習内容との関連を理解して、対応する課題に取り組むこと。 2. 最新の教育事情(学校での出来事、各種教育関係情報、教育行政など)に関心を払い、関係する書籍・新聞・テレビ・ラジオ等をよく視聴すること。 3. 参考文献等により知識の深化を図ること。			
教科書		必要に応じてプリント等を配付する			
参考文献		教職課程シリーズ 三訂版 教育の方法と技術 平沢 茂 編集 図書文化社			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合	0%	0%	70%	30%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(教育方法論)

科 目 名	教育とICT活用				
配 当 学 年	2年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	1 単位	授業回数	8
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	現代の学校を取り巻くICT環境は急速に変化しており、社会において求められる情報リテラシーも高度化している。また生徒は問題発見・解決能力の獲得が求められ、学校には「主体的・対話的な深い学び」に呼応した学習形態の積極的な導入が求められている。これにより、従来の一方通行型の授業形態のみならず、アクティブラーニングに代表されるような双方向型等、多様な授業形態での指導や、ICTの効果的な活用も求められている。またeラーニングや遠隔授業等のインターネットを利用した学習方法、電子黒板やタブレットと言った学習デバイス、グラフィックスやアニメーションを用いた学習コンテンツや学習アプリケーションなど、ICT活用による授業の取組は、生徒の授業への興味関心を高め、授業の振り返り等での学習履歴の活用等により、学力向上につながる事が期待されている。 「教育とICT活用」では、情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進の在り方、並びに児童及び生徒に情報活用能力(情報モラルを含む)を育成するための指導法に関する基礎的な知識・技能の修得を図るとともに、ICT活用や新しい授業形態等を俯瞰した授業デザインや指導法の方略を通じた、教育方法の概観の修得を図ることを目的とし、基本的なデジタル教材の作成を行い、それを用いた授業での指導法についての評価(発表)を行う。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 情報通信技術の活用の意義と理論について説明できる 2. 情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務推進の在り方について説明できる 3. 児童および生徒に情報活用能力(情報モラルを含む)を育成するための基礎的な指導法について説明できる 4. ICTを活用した学習・授業形態について説明できる 5. 基本的なデジタル教材を作成できる				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	%			
	専門知識	70%	レポート(40)・プレゼンテーション(30)		
	倫理観	10%	レポート(5)・プレゼンテーション(5)		
	主体性	5%	プレゼンテーション(5)		
	論理性	10%	レポート(5)・プレゼンテーション(5)		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	5%	プレゼンテーション(5)		
	責任感	%			
授業の展開					
1.	教育におけるICT活用の意義と目的				
2.	ICTによる学習指導と校務推進での活用				

3.	ICT活用による授業デザイン				
4.	デジタル教材の分析				
5.	デジタル教材の設計				
6.	デジタル教材の開発				
7.	デジタル教材の評価(発表)				
8.	まとめと振り返り				
9.					
10.					
11.					
12.					
13.					
14.					
15.					
授業外学修について		1. 配付された学習資料・補足資料を見直し、学習内容との関連を理解して、対応する課題に取り組むこと。 2. 最新の教育事情(学校での出来事、各種教育関係情報、教育行政など)に関心を払い、関係する書籍・新聞・テレビ・ラジオ等をよく視聴すること。 3. 参考文献等により知識の深化を図ること。			
教科書		必要に応じてプリント等を配付する			
参考文献		教職課程シリーズ 三訂版 教育の方法と技術 平沢 茂 編集 図書文化社			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合	0%	0%	50%	50%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(教育とICT 活用)

科 目 名		生徒・進路指導論				
配 当 学 年		2年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類		講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者		五浦 哲也(非常勤講師)		単位認定責任者	五浦 哲也	
実務経験の有無		無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容		-				
授 業 科 目 の 概 要		生徒指導の意義を理解し、いじめ、不登校、暴力行為、喫煙、薬物乱用、万引き、学級崩壊、授業不成立、インターネット等の生徒指導諸問題に対し、生徒理解を中心に自己指導能力の育成することの重要性を理解する。また、チーム学校を機能させていくために生徒指導の年間計画に基づき組織的に校内外連携の在り方についても学んでいく。教師として求められる生徒指導諸問題への対応や体罰防止、生徒懲戒等の法的理解とその遵守、進路指導及びキャリア教育を踏まえた生徒指導の視点について、各章の関連づけて理解していく。生徒指導に関する演習を通して、体験的に生徒指導に対する考えを深めるとともにチーム学校の基盤となる組織風土に不可欠なコミュニケーション能力の向上を目指す。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標		1. 生徒指導の理念や意義と学校における全教育活動における計画やチームとしての学校の視点から校内外連携の重要性について理解し説明できる。 2. 生徒指導の原理や方法に基づいた生徒指導対応の基本をふまえた教師の姿勢について説明できる。 3. 進路指導やキャリア教育の意義の視点と生徒指導を関連づけて説明できる。 4. 生徒指導諸問題の解決方策について本講義等の知識・理解を踏まえ、生徒理解に基づき主体的に考え、判断し、説明することができる。 5. 生徒指導に関する知識・理解と演習との関連づけて理解し、主体的・協働的に演習に取り組むことができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法		項目	割合	評価方法		
		基礎学力	%			
		専門知識	80%	毎回のレポート、小テスト(確認テスト)		
		倫理観	5%	毎回の演習やレポート		
		主体性	5%	毎回の演習への参加状況、授業への取組状況		
		論理性	%			
		国際感覚	%			
		協調性	5%	毎回の演習への参加状況		
		創造力	%			
		責任感	5%	毎回の演習への参加状況、レポート提出状況		
授業の展開						
1.	ガイダンス、第1章 生徒指導の基本					
2.	第2章 児童生徒理解					
3.	第3章 教師の姿					
4.	第4章 生徒指導体制					
5.	第5章 教育相談					

6.	第6章 子どもに自立を促す生徒指導の手法①				
7.	第6章 子どもに自立を促す生徒指導の手法②				
8.	第7章 生徒懲戒と体罰、出席停止				
9.	第8章 少年非行				
10.	第9章 いじめ				
11.	第10章 不登校				
12.	第11章 学級経営と授業				
13.	第12章 多様な子どもたち				
14.	第13章 キャリア教育①				
15.	第13章 キャリア教育② 第14章 危機管理				
授業外学修について		・次回の講義内容についてテキストを通読し、キーワードの理解や概要を把握しておく ・各回の授業後に学習事項をノートに整理し、他の教職に関する科目との関連させながら復習を行い理解を深める			
教科書		『五訂版 入門生徒指導「生徒指導提要(改訂版)」を踏まえて』(片山紀子)学事出版			
参考文献		「生徒指導提要(改訂版)」(PDF版 https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_jidou02-000024699-001.pdf)			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	○	○	×	○
成績評価の割合	0%	40%	40%	0%	20%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	「その他のテスト」…講義内容の小テスト(確認テスト)、課題の点数 「取組み状況等」…各回の授業時における演習や課題解決学習の取組み状況				

(生徒・進路指導論)

科 目 名	教育相談				
配 当 学 年	3年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	西郷 達雄(非常勤講師)		単位認定責任者	西郷 達雄	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授業科目の概要	授業は講義、実技練習、集団討議、発展的な調べ学習、発表等から成る。講義では、精神医学、来談者中心療法、認知行動療法等の基礎的な理論を概観する。実技練習では、カウンセリング応答技法、構成的エンカウンターグループ等の個別・集団向け技法をロールプレイング等により体験する。昨今の教育相談の諸課題について、スクールカウンセラーを初めとする関連職員と連携をし、「チーム学校」で働くための具体的方法論を生み出すことを目的として、集団討論、調べ学習、発表会等を行う。				
授業科目の到達目標	児童・生徒のメンタルヘルス、学校不順応の問題に関する諸課題を深く理解し、その対策にあたることのできる人材の養成を目的として、教育行政、精神医学、臨床心理学、教育心理学等の主要理論を概観し、専門的知識や実技を習得する。またそれらの知見を応用した実践的対応の在り方を考える。具体的には以下の6点が含まれる。 1. 教育相談に関連する諸理論を知る。 2. 個別及び集団カウンセリング実技の実技を修得する。 3. 児童・生徒の心の悩みに即した教育相談的対応を立案し、実行できる。 4. 児童・生徒に関連の深い精神障害や発達障害の概要を知り、その対応方法を考えることができる。 5. いじめや不登校、インターネットトラブル、自殺などの教育相談に関する諸課題を取り上げ、それらの対応方法を、精度の高い学術・行政等の情報を調査し、集団討議を行い、修正された最終到達知見を公表するという学習体験に基づいて考究する。 6. 学習成果を振り返り、自己の課題に気づき、今後の自律的学習のあり方を計画する。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	20%	定期試験		
	専門知識	30%	定期試験		
	倫理観	20%	レポート		
	主体性	5%	実技・演習		
	論理性	5%	レポート		
	国際感覚	5%	レポート		
	協調性	5%	実技・演習		
	創造力	5%	レポートおよび実技・演習		
	責任感	5%	レポートおよび実技・演習		
授業の展開					
1.	オリエンテーション～教育相談の在り方と国内外での位置づけ				
2.	教育相談に活かすカウンセリング理論と倫理的配慮				
3.	教育相談に活かすカウンセリング実技～積極的傾聴法				

4.	教育相談に活かす認知行動療法					
5.	教育相談に活かす認知行動療法の実技					
6.	学校適応からみた精神疾患					
7.	学校適応からみた発達障害の特徴					
8.	中間試験と学習状況の再確認					
9.	予防的視点を持った教育相談～コミュニケーション教育					
10.	予防的視点を持った教育相談～構成的エンカウンターグループ					
11.	ケーススタディ～不登校					
12.	ケーススタディ～インターネットいじめ					
13.	ケーススタディ～子どもの自殺					
14.	ケーススタディ～児童虐待					
15.	教育相談活動の今後の課題					
授業外学修について		【レポート課題】 15回の授業終了後、レポートの提出を求める。 【授業外学修】 1. 授業前: 事前に教科書や資料を通読し、授業の展開する筋道を予想すること。同時に、疑問点をメモしながら、実際に質問するとしたらどんな発言をすればよいか、考えておくこと。 2. 授業後: プリントやノートを見ながら、授業の内容を思い出し、筋道立ててノートに(またはパソコンで)まとめること。 3. 生徒指導提要(改訂版)は各自文部科学省のHPより授業前にダウンロードしておくこと。				
教科書		教育相談 第2版(Next教科書シリーズ) 津川律子編集 弘文社				
参考文献		生徒指導提要(改訂版) 文部科学省 教育相談の理論と実践 河村 茂雄 図書文化社 体験型ワークで学ぶ教育相談 小野田 正利 大阪大学出版 ロールプレイで学ぶ教育相談ワークブック:子どもの育ちを支える 向後 礼子 ミネルヴァ書房				
試験等の実施		定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
		○	×	○	×	○
成績評価の割合		60%	0%	30%	0%	10%
成績評価の基準		本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項						

(教育相談)

科 目 名	教育実習事前事後指導				
配 当 学 年	3年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	演習	単位数	1 単位	授業回数	10
授 業 担 当 者	近藤 浩文、今井 順一		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	既習の教職科目の内容を基礎として、教育実習の意義や具体的な内容について紹介し、説明する。また、生徒指導や教科指導に係る具体的な課題についてグループディスカッションを行いながら、教員や教育実習生としての心得や望ましい行動について考察する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 実習の意義、準備と心得、終了後の評価・改善の教師力を身に付けることができる。 2. 教育実習校で使用する教科書等を研究し、「魅力ある授業」づくりができる。 3. 魅力ある学級指導をするために、教師の「コミュニケーション力」を身に付けることができる。 4. 「実習日誌」の効果的な記録を取り、指導教諭との密な相談ができる。 5. 教育実習等の報告について分かりやすいプレゼンテーションができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	0%			
	専門知識	50%	レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	10%	レポート、取組状況		
	主体性	15%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	0%			
	国際感覚	0%			
	協調性	5%	取組状況		
	創造力	5%	プレゼンテーション		
	責任感	15%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
授業の展開					
1.	教育実習の意義・内容等の指導、オリエンテーション				
2.	教員の1日とその役割(各学校の学校要覧使用)				
3.	教育実習日誌の意義・内容とその記入				
4.	教育実習の心得(1)「①事前準備、②学校規則」				
5.	特別支援教育:「特別支援教育と介護等体験」の意義と事前指導				
6.	教育実習の心得(2)「③教員マナー、④授業の準備」				
7.	教育実習の心得(3)「⑤学習指導案作成、模擬授業」				
8.	教育実習の心得(4)「⑥ICTを活用した教材を取り入れた模擬授業」				
9.	教育実習・介護等体験終了後 「教育実習報告・介護等体験」プレゼンテーション				
10.	学外実習や学内研修(TA実習研修)を顧みて、初任教員の心構えの指導				
11.					
12.					

13.					
14.					
15.					
授業外学修について	<授業外学修> ・授業理解のための予習課題を提示するので、発表できるよう準備をすること ・授業の確認と定着を図る課題を提示する。 教育実習終了後、3年生向けに「実習の実践報告」、「介護等体験の実践報告」をプレゼンテーションする。				
教科書	・教育実習日誌(学術図書出版) ・教育実習の手引き(学術図書出版) ・中学校・高等学校「学習指導要領」(文部科学省) ・中学校・高等学校「学習指導要領解説」(文部科学省)				
参考文献	・出身高等学校等の「学校要覧」 ・必要に応じて、授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	○
成績評価の割合	0%	0%	40%	50%	10%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【レポート】 講義内容や学校体験実習の内容についてレポートを課す。 【プレゼンテーション】 講義内容や学校体験実習の内容について、プレゼンテーションを行う。 【取組状況】 講義中の発問やグループ協議、学校体験実習等への取組状況を評価する。				

(教育実習事前事後指導)

科 目 名	教育実習Ⅰ				
配 当 学 年	4年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	実習	単位数	4 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文、今井 順一		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	3週間の教育実習の意義や実習のための準備と心得を確認し、教育実習期間では多様な教育活動に直面しながら教師として必要な「教科指導力」、「学級指導力」の基礎知識、技能を実践的に学修する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 教育実習の意義を確認し、自己の資質能力を最大限発揮できる。 2. 実習校に関して「学校要覧」やHP(ホームページ)から「教育目標」などを調査研究できる。 3. 実習現場において、自信とプライドをもって3週間の「授業指導」ができる。 4. 学校現場において、生徒とのより良いコミュニケーションを図り、学級指導ができる。 5. 学校現場では、教職員とのコミュニケーションを図ることができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	0%			
	専門知識	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	倫理観	25%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	主体性	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	10%	レポート、プレゼンテーション		
	国際感覚	0%			
	協調性	5%	取組状況		
	創造力	10%	プレゼンテーション、取組状況		
	責任感	10%	取組状況		
授業の展開					
1.	教育実習の意義・内容等の指導				
2.	教育実習日誌の書き方				
3.	本学の「教育実習の心得」を確認				
4.	教育実習の心得(1)事前準備				
5.	教育実習の心得(2)学校の規則(服務)				
6.	教育実習の心得(3)実習生のマナー意識				
7.	教育実習の心得(4)授業実習の基本準備				
8.	「学習指導案の作成」(1)				
9.	「学習指導案の作成」(2)				
10.	教育実習反省記録の作成				
11.	教育実習体験発表①(専門教科)				
12.	教育実習体験発表②(学校経営・特別活動)				
13.	教育実習体験発表③(特別支援教育)				

14.	教育実習体験発表④(社会福祉施設)				
15.	教育実習のふり返し(プレゼンテーション)				
授業外学修について	<学校現場実習は、3週間実施する> <授業外学修> ・教材開発のためのスキル獲得の予習・復習課題を提示するので発表の準備をすること。 ・授業の確認と定着を図る課題を提示する				
教科書	・教育実習日誌、教育実習の手引き(学術図書出版) ・高等学校学習指導要領解説(文部科学省) 【理科編】、【数学編】、【総則】、【特別活動編】、【総合的な探究の時間編】 ・中学校・高等学校学習指導要領(文部科学省) ・生徒指導提要(文部科学省)				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	○
成績評価の割合	0%	0%	25%	25%	50%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【プレゼンテーション】 教育実習の内容、成果と課題についてプレゼンテーションを行う。 【レポート】 教育実習の内容、成果と課題についてレポートを課す。 【取組状況】 実習校での取組状況や教育実習日誌の記入状況を評価する。 ・教育実習の前後を通じて「課題・アンケート」を課す。				

(教育実習Ⅰ)

科 目 名	教育実習Ⅱ				
配 当 学 年	4年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	実習	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文、今井 順一		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	3週間の教育実習の意義や実習のための準備と心得を確認し、教育実習期間では多様な教育活動に直面しながら教師として必要な「教科指導力」、「学級指導力」の基礎知識、技能を実践的に学修する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 教育実習の意義を確認し、自己の資質能力を最大限発揮できる。 2. 実習校に関して「学校要覧」やHP(ホームページ)から「教育目標」などを調査研究できる。 3. 実習現場において、自信とプライドをもって3週間の「授業指導」ができる。 4. 学校現場において、生徒とのより良いコミュニケーションを図り、学級指導ができる。 5. 学校現場では、教職員とのコミュニケーションを図ることができる				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	0%			
	専門知識	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	倫理観	25%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	主体性	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	10%	レポート、プレゼンテーション		
	国際感覚	0%			
	協調性	5%	取組状況		
	創造力	10%	プレゼンテーション、取組状況		
	責任感	10%	取組状況		
授業の展開					
1.	教育実習の意義・内容等の指導				
2.	教育実習日誌の書き方				
3.	本学の「教育実習の心得」を確認				
4.	教育実習の心得(1)事前準備				
5.	教育実習の心得(2)学校の規則(服務)				
6.	教育実習の心得(3)実習生のマナー意識				
7.	教育実習の心得(4)授業実習の基本準備				
8.	「学習指導案の作成」(1)				
9.	「学習指導案の作成」(2)				
10.	教育実習反省記録の作成				
11.	教育実習体験発表①(専門教科)				
12.	教育実習体験発表②(学校経営・特別活動)				
13.	教育実習体験発表③(特別支援教育)				

14.	教育実習体験発表④(社会福祉施設)				
15.	教育実習のふり返し(プレゼンテーション)				
授業外学修について	<学校現場実習は、2週間実施する> <授業外学修> ・教材開発のためのスキル獲得の予習・復習課題を提示するので発表の準備をすること。 ・授業の確認と定着を図る課題を提示する。				
教科書	・教育実習日誌、教育実習の手引き(学術図書出版) ・高等学校学習指導要領解説(文部科学省) 【理科編】、【数学編】、【総則】、【特別活動編】、【総合的な学習の時間編】 ・中学校・高等学校学習指導要領(文部科学省) ・生徒指導提要(文部科学省)				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	○
成績評価の割合	0%	0%	25%	25%	50%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【プレゼンテーション】 教育実習の内容、成果と課題についてプレゼンテーションを行う。 【レポート】 教育実習の内容、成果と課題についてレポートを課す。 【取組状況】 実習校での取組状況や教育実習日誌の記入状況を評価する。 ・教育実習の前後を通じて「課題・アンケート」を課す。				

(教育実習Ⅱ)

科 目 名		教職実践演習				
配 当 学 年		4年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類		演習	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者		近藤 浩文、今井 順一		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無		無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容		－				
授 業 科 目 の 概 要		教育実習で経験し学修した内容を発展させ、プロ教師としての資質を高めるため、実践的な職務内容について学修する。小学校、中学校、定時制高等学校訪問など実践教育についての意欲を高め、視野を広げる様々な取組を行う。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標		1. 教育実習を振り返り、生徒を中心に考えた「教師力」を身に付けることができる。 2. 教育に対する使命感や情熱をもち、自己研鑽に励むことができる。 3. 高い倫理観や規範意識、困難に立ち向かう強い意志をもって職責を果たすことができる。 4. 組織の一員としての自覚をもち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。 5. 子どもとの信頼関係を築き、学級集団を把握して規律ある学級経営を行うことができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法		項目	割合	評価方法		
		基礎学力	0%			
		専門知識	20%	レポート		
		倫理観	20%	レポート、プレゼンテーション		
		主体性	20%	レポート、プレゼンテーション		
		論理性	0%			
		国際感覚	0%			
		協調性	10%	プレゼンテーション		
		創造力	10%	プレゼンテーション		
		責任感	20%	レポート、プレゼンテーション		
授業の展開						
1.	オリエンテーション					
2.	教職の意義・教員の役割、職務内容、生徒指導(グループ討論)					
3.	教職の意義・教員の役割、職務内容、生徒指導(ロールプレーイング)					
4.	社会性、対人関係能力についてのグループ討論					
5.	教員の資質能力についての講義と確認					
6.	模擬授業(TT)の実施「数学」(検討会)					
7.	模擬授業(TT)の実施「理科」(検討会)					
8.	学校現場の見学・調査(中学校訪問研修)					
9.	教科の専門指導力についての講義					
10.	教科の指導力についてのグループ討論					
11.	学校現場の見学・調査(小学校訪問研修)					
12.	学校現場の見学・調査(高校定時制課程訪問研修)					
13.	コミュニケーション能力について(グループ討論)					

14.	生徒理解を活かした学級経営について(グループ討論)				
15.	特別支援教育と介護体験について(グループ討論)				
授業外学修について	<授業外学修> ・授業理解のために課題を提示するので、自らの考えをまとめてプレゼンを行う準備をすること。				
教科書	・教育実習日誌(学術図書出版) ・教育実習の手引き(学術図書出版) ・高等学校学習指導要領解説(文部科学省) ・中学校学習指導要領解説(文部科学省) ・生徒指導提要(文部科学省)				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する ・出身高等学校「学校要覧」、教育実習校「学校要覧」				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合	0%	0%	50%	50%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【レポート】 講義内容や学校体験実習の内容についてレポートを課す。 【プレゼンテーション】 講義内容や学校体験実習の内容について、プレゼンテーションを行う。また、TTによる模擬授業を行う。				

(教職実践演習)

科 目 名	理科教育法 I				
配 当 学 年	2年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	理科教育の目的、目標と理科教育の現状を理解し、指導法や評価などの基礎的な学習指導理論を学修する。 具体的な授業場面を想定した授業設計の方法など授業実践に必要な指導力養う。授業形態はグループワーク、集団討論を取り入れて行う。 また、基礎学力向上を目的とした理科に関する専門力試験を実施する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 学習指導要領改訂の背景や、理科の目的、目標について説明することができる。 2. 理科の見方・考え方や観察、実験の意義・目的を理解し、説明することができる。 3. 観察、実験の指導及び指導上の留意事項について理解し、説明することができる。 4. 学習指導要領を踏まえて作成した「学習指導案」をもとに、模擬授業を行うことができる。 5. 探究的な学習やICT活用を取り入れた理科授業を立案し、学習評価までを省察することができる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	30％	その他のテスト		
	専門知識	40％	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	％			
	主体性	％			
	論理性	20％	定期試験、レポート、プレゼンテーション		
	国際感覚	0％			
	協調性	0％			
	創造力	10％	レポート、プレゼンテーション		
	責任感	0％			
授業の展開					
1.	ガイダンス・専門力試験				
2.	学習指導要領改訂の背景と理科教育の目的・目標				
3.	理科の見方・考え方, 見通しをもった観察、実験				
4.	理科の授業における「主体的、対話的で深い学び」				
5.	理科の教材研究及び教材の開発				
6.	理科の授業における学習評価				
7.	学習指導案作成の観点と模擬授業の計画				
8.	学習指導案の作成				
9.	学習指導案に基づく模擬授業(1)				
10.	学習指導案に基づく模擬授業(2)				
11.	理科における観察、実験の指導と安全指導				

12.	理科の授業における探究的な学習の指導				
13.	理科授業の実際(中学校理科、高等学校理科)				
14.	専門力試験				
15.	理科の探究活動・課題研究の指導				
授業外学修について	<授業外学修> ・理科の4分野について継続的に学習し、基礎学力を向上させること ・授業理解のための予習課題を提示するので事前に調べておくこと ・授業内容に関する小テストを実施するので常に復習をすること ・理科の授業に関する課題を提示するので、レポートにまとめたりプレゼンテーション資料を作成すること ・模擬授業のための、学習指導案を作成すること				
教科書	(1)中学校学習指導要領解説「理科編」 (2)高等学校学習指導要領解説「理科・理数編」				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	○	○	○	×
成績評価の割合	30%	30%	20%	20%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【定期試験】 講義内容について、定期試験を行う。教科書等の持ち込みは不可。 【その他のテスト】 専門力試験及び小テストを実施する。 【レポート】 講義内容についてのレポートの他、学習指導案の作成を課す。 【プレゼンテーション】 模擬授業の前段として、授業開始時に生徒の興味関心を高める方法等についてプレゼンテーションを行う。				

(理科教育法Ⅰ)

科 目 名	理科教育法Ⅱ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授 業 科 目 の 概 要	学習指導要領における理科の目標や内容を踏まえ、基礎的な学習指導理論を理解するとともに、理科の授業の具体的な場面を想定した授業設計の方法を学修する。 授業は講義の他、模擬授業を中心にグループワークや集団討論を取り入れて行い、基礎的な教科指導力やコミュニケーション力を育成する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 学習指導要領に示された理科の目標や内容及び指導上の留意点や学習評価について理解し、単元計画を作成することができる。 2. 理科の観察、実験の意義や目的を理解し、単元計画に適切に位置付けるとともに、観察、実験を取り入れた授業を設計することができる。 3. GIGAスクール構想の趣旨を理解し、ICTを適切に活用した授業を設計することができる。 4. 他の学生の模擬授業の観察を通して、自己の指導法を改善し、より効果的な授業設計について考察することができる。 5. 教育実習校の校種に応じた理科の授業を調査研究し、観察、実験やICT活用、学習評価等を適切に取り入れた学習指導案を作成することができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	0%			
	専門知識	50%	レポート、プレゼンテーション		
	倫理観	10%	レポート、プレゼンテーション		
	主体性	10%	レポート、プレゼンテーション		
	論理性	10%	レポート、プレゼンテーション		
	国際感覚	0%			
	協調性	0%			
	創造力	10%	レポート、プレゼンテーション		
	責任感	10%	レポート、プレゼンテーション		
授業の展開					
1.	ガイダンス, 模擬授業の実施と評価				
2.	中学校、高等学校における授業の実際				
3.	学習指導要領における理科の目標・内容, 授業設計・展開の技法(1)				
4.	授業設計・展開の技法(2)				
5.	模擬授業(1)				
6.	模擬授業(2)				
7.	模擬授業(3)				
8.	模擬授業(4)				
9.	模擬授業(5)				

10.	模擬授業(6)				
11.	模擬授業(7)				
12.	模擬授業(8)				
13.	模擬授業(9)				
14.	模擬授業(10)				
15.	まとめ:授業実施の留意点				
授業外学修について		<授業外学修> ・学習指導要領解説理科編及び教科書を用いて、授業の設計や展開方法について研究すること ・授業におけるICTの適切な活用法について調査研究すること ・学習指導案を作成すること			
教科書		(1)中学校学習指導要領解説「理科編」 (2)高等学校学習指導要領解説「理科・理数編」			
参考文献		・必要に応じて、授業時に適宜指示する			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合		0%	0%	50%	50%
成績評価の基準		本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)			
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項		【レポート】 講義内容についてのレポートの他、学習指導案の作成、他の学生の模擬授業に関する評価シートの作成を課す。 【発表・プレゼンテーション】 模擬授業を計画し実施する。また、他の学生の模擬授業に関する評価・感想等を発表する。			

(理科教育法Ⅱ)

科 目 名	理科教育法Ⅲ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	長谷川 誠		単位認定責任者	長谷川 誠	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授業科目の概要	本講義では、まずいくつかの国際的な学力調査を紹介し、日本の位置を確認する。その後、いくつかの海外諸国における理科教育システムの現状やその特徴を自らが調査することを通して、それぞれの長所及び短所を理解する。さらに、日本の理科教育との比較を行うことで、自らの理科教育の実践に活用し得る特徴の有無を考える。				
授業科目の到達目標	1.日本の理科教育の現状ならびに課題について、自分の言葉で説明できる。 2.いくつかの海外諸国の理科教育システムの特徴について、自分の言葉で説明できる。 3.いくつかの海外諸国の理科教育システムと日本の理科教育システムとの共通点・相違点について、自分の言葉で説明できる。 4.自らの理科教育の実践において活用すべき海外の理科教育の特徴を、自分の言葉で説明できる。 5.授業内容をより効果的なものにするための手段やツールの活用の必要性について、自分の言葉で説明できる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	％			
	専門知識	40％	模擬授業にて評価する。		
	倫理観	％			
	主体性	20％	模擬授業にて評価する。		
	論理性	％			
	国際感覚	％			
	協調性	％			
	創造力	20％	模擬授業にて評価する。		
責任感	20％	模擬授業にて評価する。			
授業の展開					
1.	ガイダンスー日本の理科教育の現状				
2.	国際的な学力評価の手法と日本の位置				
3.	諸外国の教育システムの概要				
4.	フィンランドの理科教育(1)ー概要ー				
5.	フィンランドの理科教育(2)ー特徴と日本のシステムとの比較ー				
6.	イギリスの理科教育				
7.	アメリカの理科教育				
8.	中国の理科教育				
9.	シンガポールの理科教育				
10.	模擬授業の準備(1)				

11.	模擬授業の準備(2)				
12.	模擬授業(1)				
13.	模擬授業(2)				
14.	模擬授業(3)				
15.	模擬授業の振りかえり				
授業外学修について		授業外学修の内容については、こちらから指示しない。各自が自分の判断で、必要と思われる内容を学習すること。例としては、以下のような内容が挙げられる。 ・次回の講義内容について必要な予習を行って専門用語などを理解しておく。 ・海外諸国の理科教育システム概要や特徴を自ら調査する。 ・海外諸国の理科教育と日本の理科教育との比較(共通点及び相違点の有無など)、ならびにそこから見出し得る自らの理科教育の実践に活用すべき特徴などについては、プレゼンテーションとして発表してもらうので、必要な準備を授業外学修			
教科書		必要に応じてプリントを配布する。			
参考文献		必要に応じて講義の中で適宜指示する。			
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	×	○	○
成績評価の割合	0%	0%	0%	50%	50%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(理科教育法Ⅲ)

科 目 名		理科教育法Ⅳ				
配 当 学 年		3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類		講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者		長谷川 誠		単位認定責任者	長谷川 誠	
実務経験の有無		無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容						
授 業 科 目 の 概 要		本講義では、最近の理科教育研究(物理教育研究)の成果に基づいて現在の理科教育で実践されている教育手法の内容や特徴を紹介するとともに、それらについて自らが調査することを通して理解を深めていく。その上で、過去の重要な実験・観察手法を現代的な手段・ツールを活用して実践するための方法を検討する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標		1.最近の理科教育研究(物理教育研究)の成果に基づいて現在の理科教育で実践されている教育手法の内容や特徴を、自分の言葉で説明できる。 2.最近の理科教育研究(物理教育研究)の成果を活用した授業案を、自ら立案できる。 3.理科教育の現状に対する認識を深め、中学校理科から高等学校理科における実践的指導案、ならびに高校理科における課題研究の授業展開案を、自ら提案・立案できる。 4.自ら立案した授業展開案に基づいた模擬授業を実践できる。 5.課外活動の指導における留意事項を、自分の言葉で説明できる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法		項目	割合	評価方法		
		基礎学力	%			
		専門知識	40%	模擬授業にて評価する。		
		倫理観	%			
		主体性	20%	模擬授業にて評価する。		
		論理性	%			
		国際感覚	%			
		協調性	%			
		創造力	20%	模擬授業にて評価する。		
		責任感	20%	模擬授業にて評価する。		
授業の展開						
1.	ガイダンス、理科・物理教育の手法の研究					
2.	物理教育研究の成果の活用－素朴概念とp-prims－					
3.	認知的モデルに基づく教育手法－認知的葛藤と橋渡し－					
4.	物理教育研究に基づく手法(1)－ピア・インストラクション－					
5.	物理教育研究に基づく手法(2)－相互作用型演示実験講義(ILDs)－					
6.	ILDsの実際例(1)－波長測定－					
7.	ILDsの実際例(2)－半導体のエネルギーギャップ－					
8.	ILDsの実際例(3)－力学台車－					
9.	課外活動／探究活動の指導					
10.	I模擬授業の準備(1)					
11.	模擬授業の準備(2)					

12.	模擬授業(1)				
13.	模擬授業(2)				
14.	模擬授業(3)				
15.	模擬授業の振りかえり				
授業外学修について	授業外学修の内容については、こちらから指示しない。各自が自分の判断で、必要と思われる内容を学習すること。例としては、以下のような内容が挙げられる。 ・講義で取り上げた内容について、必要な復習を行って専門用語などの理解を深める。 ・最近の物理教育研究などの成果やそこから見出し得る自らの理科教育の実践に活用すべき特徴などについて、必要な学習を授業外学修として進める。				
教科書	必要に応じてプリントを配布する。				
参考文献	必要に応じて講義の中で適宜指示する。				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	×	○	○
成績評価の割合	0%	0%	0%	50%	50%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(理科教育法Ⅳ)

科 目 名	数学科教育法 I				
配 当 学 年	2年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	数学科教育の基本的な理論と学習指導法の理解および教師の在り方と資質向上の重要性を認識するとともに、効果的な指導法や学習デザインについての理解を深め、数学科教育の基本内容を俯瞰する。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 数学教育の意義および目的について説明できる。 2. 教材の特徴やその内容について説明できる。 3. 授業デザインの必要性について説明できる。 4. 基本的な指導案を作成できる。 5. 指導案を基にした模擬授業を行うことができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	30%	その他のテスト		
	専門知識	50%	レポート(30)・プレゼンテーション(20)		
	倫理観	10%	レポート(5)・プレゼンテーション(5)		
	主体性	%			
	論理性	10%	レポート(5)・プレゼンテーション(5)		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	%			
	責任感	%			
授業の展開					
1.	ガイダンス				
2.	数学教育における専門力				
3.	数学を活用した問題発見・問題解決能力の育成				
4.	学校現場の現状等について(外部講師)				
5.	興味関心を高める授業の工夫				
6.	数学教育の変遷				
7.	数学教育の目標と目的				
8.	「数学的な見方・考え方」を育成する授業作り				
9.	「数学的な見方・考え方」を育成する授業について発表				
10.	指導案作成の留意点				
11.	指導案の作成				
12.	作成した指導案についての発表				
13.	指導案を基にした模擬授業				

14.	指導案を基にした模擬授業				
15.	まとめ: 数学教員の在り方				
授業外学修について	授業外学修 1. 授業理解のための予習課題を提示する。 2. 授業の確認と定着を図る課題を提示する。				
教科書	高等学校学習指導要領解説 数学・理数編(文部科学省) 中学校学習指導要領解説 数学編(文部科学省)				
参考文献	必要に応じて授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	○	○	○	×
成績評価の割合	0%	30%	40%	30%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(数学科教育法Ⅰ)

科 目 名	数学科教育法Ⅱ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	数学科教員として必要な指導法について学ぶとともに、教材研究を踏まえた学習指導案による模擬授業を実施し、基本的な指導スキルと授業デザインの手法を学修する				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 教材研究を踏まえた学習指導案の作成ができる。 2. 模擬授業を通じ、基本的な指導法を習得できる。 3. 模擬授業を通じ、基本的な授業スキルを習得できる。 4. 分析・設計・開発・実施・評価を踏まえた基本的な授業デザインを習得できる。 5. 授業設計全般について基本的な取り組みについて説明できる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	%			
	専門知識	75%	技能・技術確認(50)・模擬授業(25)		
	倫理観	5%	模擬授業(5)		
	主体性	5%	模擬授業(5)		
	論理性	5%	模擬授業(5)		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	5%	模擬授業(5)		
	責任感	5%	模擬授業(5)		
授業の展開					
1.	授業計画と学習指導案				
2.	学習指導案作成の基本				
3.	学習指導案と教材研究				
4.	学習指導案の作成と評価				
5.	教材研究と教材開発				
6.	学習教材の作成と評価				
7.	教育機器の活用と授業実践				
8.	デジタル教材の活用と授業実践				
9.	指導スキルと授業デザイン				
10.	模擬授業1				
11.	模擬授業2				
12.	模擬授業3				
13.	模擬授業4				
14.	模擬授業5				

15.	まとめ:授業実施の留意点				
授業外学修について	授業外学修 1. 授業理解のための予習課題を提示する。 2. 授業の確認と定着を図る課題を提示する。 その他 1. 模擬授業を行い、授業計画・授業内容・指導内容等の評価を行う				
教科書	高等学校学習指導要領解説 数学・理数編(文部科学省) 中学校学習指導要領解説 数学編(文部科学省)				
参考文献	必要に応じて授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	○	×	○	×
成績評価の割合	0%	50%	0%	50%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(数学科教育法Ⅱ)

科 目 名	数学科教育法Ⅲ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	学校現場での定期試験等を想定した試験問題作成を行う。その際授業との整合性や関連性を踏まえ教材の本質を学ぶための教材研究に取り組む。各自が作成した試験問題は発表することとする。 効果的な授業展開および授業改善のために、インストラクショナルデザインを基礎に学習教材開発の手法を学ぶ。さらに教材の開発手法をもとに、授業での利用を中心としたICT活用教材を作成する。また作成した教材を使った模擬授業の評価も行う。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. インストラクショナルデザインの概要を説明できる。 2. 教材開発の手法を説明できる。 3. 基本的なデジタル教材を作成し模擬授業を行うことができる。 4. 総括的評価に準拠した定期試験試験問題を作成することができる。 5. 作成した試験問題と教科書や授業内容との関連性について説明することができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	%			
	専門知識	60%	試験問題作成・デジタル「教材開発(40)、プレゼンテーション(20)		
	倫理観	10%	問題作成・デジタル教材開発(5)、プレゼンテーション(5)		
	主体性	10%	問題作成・デジタル教材開発(5)、プレゼンテーション(5)		
	論理性	10%	問題作成・デジタル教材開発(5)、プレゼンテーション(5)		
	国際感覚	%			
	協調性	%			
	創造力	10%	試験問題作成・デジタル教材開発(5)、プレゼンテーション(5)		
	責任感	%			
授業の展開					
1.	ガイダンス インストラクショナルデザインについて				
2.	教材の分析				
3.	教材研究				
4.	教材の設計				
5.	デジタル教材の作成				
6.	学習指導案の作成				
7.	模擬授業				
8.	模擬授業の分析・評価				
9.	試験問題の作成の留意点について				
10.	試験問題の作成1(教科書の分析)				

11.	試験問題の作成2(学習内容についての分析)				
12.	試験問題の作成3(試験問題の開発)				
13.	作成した試験問題の発表				
14.	作成した試験問題についての分析・評価				
15.	まとめと振り返り				
授業外学修について	1. 教材開発のためのスキル獲得の予習・復習課題を提示する 2. 学習指導案の作成を課す				
教科書	数学の学び方・教え方(岩波新書)・遠山 啓 著・岩波書店 中学・高等学校学習指導要領解説数学編(文部科学省)				
参考文献	必要に応じて授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合	0%	0%	60%	40%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(数学科教育法Ⅲ)

科 目 名	数学科教育法Ⅳ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	今井 順一		単位認定責任者	今井 順一	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	ICT活用による授業の理論と実践を結びつけるための授業の在り方を学ぶ。理論と実践の融合には多くの課題がある。教育現場（授業・教室）は分単位で変化しており、これに対応するさまざまなアプローチの検討を行う。また課題研究としてICT活用による授業のデザイン案の作成とその評価を行う。具体的には作成したデジタル教材を活用した模擬授業を行い、通常の授業との比較等を含めた評価を行う。その際代表的な学習支援用アプリケーションおよびタブレット等を用いた授業設計とする。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. インストラクショナルデザインについて詳細な説明ができる。 2. 発展的な教材開発の手法を説明できる。 3. 発展的なデジタル教材を活用することができる。 4. さまざまなICT機器やアプリケーションを活用した授業設計を行うことができる。 5. 授業設計を用いて、模擬授業を行うことができる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	％			
	専門知識	50％	模擬授業（25）・教材開発及び指導案（25）		
	倫理観	10％	模擬授業（5）・教材開発及び指導案（5）		
	主体性	10％	模擬授業（5）・教材開発及び指導案（5）		
	論理性	10％	模擬授業（5）・教材開発及び指導案（5）		
	国際感覚	％			
	協調性	％			
	創造力	10％	模擬授業（5）・教材開発及び指導案（5）		
	責任感	10％	模擬授業（5）・教材開発及び指導案（5）		
授業の展開					
1.	授業研究の新しい視点と方法				
2.	授業理論の構築				
3.	授業づくりの手がかり				
4.	授業理解				
5.	授業計画				
6.	授業実施				
7.	授業効果				
8.	授業分析				
9.	授業評価				
10.	カリキュラム研究				
11.	模擬授業①分析				

12.	模擬授業②設計				
13.	模擬授業③開発				
14.	模擬授業④実施				
15.	模擬授業⑤評価				
授業外学修について	1. 教材開発および授業設計のスキル獲得のための予習・復習課題を課す 2. 授業デザインに基づく学習指導案の作成を課す				
教科書	無限と連続(岩波新書)・遠山 啓 著・岩波書店 中学・高等学校新学習指導要領解説数学編(文部科学省)				
参考文献	必要に応じて授業時に適宜指示する				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	×
成績評価の割合	0%	0%	50%	50%	0%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(数学科教育法Ⅳ)

科 目 名	情報科教育法 I				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	小松川 浩、仲林 清、石田 雪也		単位認定責任者	小松川 浩	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	本講義では、教科情報を教えるための基本的な概念と背景について理解を深め、教科情報を指導するための基本的な素養を学ぶ。また、あわせて学校教育での情報化を進めることのできる人材の育成を図るための基本的な素養を学ぶことも目的とする。このため、第一に、教科「情報」を教える上での基本的な情報処理の知識の確認を図る。また、校務の情報化に関する必要性を理解するため、施策の動向とICT活用教育の事例について理解を深める。次に、他の教科全体を通じたICT活用教育という視点に立ち、情報メディアを活用した授業展開の設計を行えるようにする。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 情報の科学的理解を説明できる。 2. 情報とメディアを説明できる。 3. 情報活用の基本的なスキルを活用できる。 4. 情報モラルに関する知識を説明できる。 5. 上記を総合して教育の情報化で求められる技能を活用した授業実践ができる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	20％	CBTの結果		
	専門知識	50％	CBTの結果・プログラミング課題の成果		
	倫理観	％			
	主体性	20％	授業の参加度		
	論理性	％			
	国際感覚	％			
	協調性	％			
	創造力	％			
	責任感	10％	模擬授業の実践		
授業の展開					
1.	教科情報の背景・全体構造の理解				
2.	学習指導要領改訂の経緯				
3.	初等第教育の情報化と情報教育				
4.	情報の目的とねらい				
5.	情報Ⅰの目標、科目編成				
6.	情報Ⅰの指導計画の作成				
7.	情報Ⅰの内容の取り扱い				
8.	情報Ⅰの課題選択の観点				
9.	情報Ⅰの評価の考え方				
10.	情報モラルの取り扱い				
11.	情報Ⅱの目標、科目編成				

12.	情報Ⅱの指導計画の作成				
13.	情報Ⅱの内容の取扱い				
14.	情報Ⅱの課題選択の観点				
15.	情報Ⅱの評価の考え方				
授業外学修について		高校の情報の教科書を自ら読み、必要な知識に関連した作題を予習課題とする。			
教科書		なし			
参考文献		社会と情報(実教出版) 情報の科学(実教出版)			
試験等の実施	定期試験	その他の テスト	課題・ レポート	発表・プレゼン テーション	取組状況等
	○	×	○	×	○
成績評価の割合	30%	0%	30%	0%	40%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(情報科教育法Ⅰ)

科 目 名	情報科教育法Ⅱ				
配 当 学 年	3年	必修・選択	選択	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	講義	単位数	2 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	小松川 浩、仲林 清、石田 雪也		単位認定責任者	小松川 浩	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容					
授 業 科 目 の 概 要	本講義では、教科情報を指導する上で、必要となる具体的な指導方法について学ぶとともに、ICT活用による授業を行える実践力の養成を目的とする。このため、第一に、教科「情報」の基本的な教授領域に関する指導方法について、情報基礎からインターネット応用まで幅広く学習する。次に、こうした教授領域を実際に想定して、情報メディア教材を自分で作成し、授業実践を行えるように学んでいく。適宜、外部評価を加えながら、実践的な指導能力の養成を図る。				
授 業 科 目 の 到 達 目 標	1. 情報の科学的理解に関する教材を作成できる。 2. 情報とメディアに関する教材を作成できる。 3. 情報モラルに関する教材を作成できる。 4. 情報活用に関する教科指導を行うための基本的な知識・技能を身につけることができる。 5. 基本的な技能に基づき、授業実践を試行できる。				
学修成果評価項目（％）および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	30％	CBTの実施		
	専門知識	30％	CBTの実施		
	倫理観	10％	振り返り		
	主体性	20％	課題達成状況		
	論理性	％			
	国際感覚	％			
	協調性	％			
	創造力	％			
	責任感	10％	最終課題の発表		
授業の展開					
1.	ガイダンス				
2.	実習中心の授業運営（ICTの効果的活用）				
3.	授業環境の整備（ICT活用含む）				
4.	学習目標と学習評価				
5.	授業づくりのヒント―事例紹介				
6.	教材・教具の研究				
7.	模擬実習①計画立案				
8.	模擬実習②制作				
9.	模擬実習③成果発表				
10.	指導上の課題				
11.	学習指導計画				
12.	学習指導案の意義				

13.	学習指導案の立案・制作				
14.	学習指導案の発表				
15.	模擬授業				
授業外学修について	高校の情報の内容に関連するEラーニング教材を自学自習する。中間テストでは、この内容の試験を課す。これに合格しない場合には、単位は付与しない。				
教科書	文科省 公式サイト（予定教材案） https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1416756.htm				
参考文献	なし				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	○	×	○	○	○
成績評価の割合	30%	0%	20%	20%	30%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69点～60点)、不可(59点～0点)				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項					

(情報科教育法Ⅱ)

科 目 名	学校体験活動				
配 当 学 年	3年	必修・選択	必修	CAP制	対象外
授 業 の 種 類	実習	単位数	1 単位	授業回数	15
授 業 担 当 者	近藤 浩文		単位認定責任者	近藤 浩文	
実務経験の有無	無				
実務経験のある教員名および授業の関連内容	－				
授業科目の概要	小中学校での学習サポート事業と学校インターンシップのための準備と心得を確認し、これらの学校体験では児童生徒との接し方や指導上の留意点、教職員の仕事内容等を体験を通して学ぶ。				
授 業 科 目 の 到達 目 標	1 学校体験活動の意義を確認し、教員の仕事内容と教員として必要な資質能力について体験を通して把握し、記述することができる。 2 体験活動では、児童・生徒とのコミュニケーションを図り、適切に指導することができる。 3 児童生徒への学習指導を通して、児童の学力を向上させることができる。 4 体験活動では、教職員とのコミュニケーションを図り、報告・連絡・相談を適切に行うことができる。 5 体験活動では、学校の意義について体験を通して理解し記述することができる。				
学修成果評価項目(%)および評価方法	項目	割合	評価方法		
	基礎学力	0%			
	専門知識	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	倫理観	25%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	主体性	20%	レポート、プレゼンテーション、取組状況		
	論理性	10%	レポート、プレゼンテーション		
	国際感覚	0%			
	協調性	5%	取組状況		
	創造力	10%	プレゼンテーション、取組状況		
	責任感	10%	取組状況		
授業の展開					
1.	ガイダンス(学校体験活動の意義・内容の指導)				
2.	学校体験活動の心得・・・学校体験活動中のルールとマナー				
3.	学校体験活動①・・・学校教育環境の把握と理解				
4.	学校体験活動②・・・学校教育課程の理解と研究				
5.	学校体験活動③・・・学級経営の実習				
6.	学校体験活動④・・・学習指導方法の理解				
7.	学校体験活動⑤・・・学習指導の体験活動				
8.	学校体験活動⑥・・・授業補助実習①(観察・参加)				
9.	学校体験活動⑦・・・授業補助実習②(実践)				
10.	学校体験活動⑧・・・特別活動、生徒理解の実習活動				
11.	学校体験活動⑨・・・授業補助実習③(実践・・・ICT活用含む)				
12.	学校体験活動の反省記録の作成				

13.	学校体験活動の成果と課題①・・・グループワーク				
14.	学校体験活動の成果と課題②・・・ロールプレイ				
15.	学校体験活動発表会と振り返り				
授業外学修について	小中学校学習サポート事業は、夏季休業、冬季休業中にそれぞれ1回ずつ実施する。学校インターンシップは3年次夏季休業中に実施する。 ＜授業外学習＞ 児童生徒の指導についてロールプレイをするので場面指導の準備をすること。				
教科書	学習指導要領（文部科学省） 生徒指導提要（文部科学省）				
参考文献	・必要に応じて、授業時に適宜指示する。				
試験等の実施	定期試験	その他のテスト	課題・レポート	発表・プレゼンテーション	取組状況等
	×	×	○	○	○
成績評価の割合	0%	0%	25%	25%	50%
成績評価の基準	本学の評価基準に基づき、成績評価を行う。 秀（100～90点）、優（89～80点）、良（79～70点）、可（69点～60点）、不可（59点～0点）				
試験等の実施、成績評価の基準に関する補足事項	【プレゼンテーション】 学校体験活動の内容、成果と課題についてプレゼンテーションを行う。 【レポート】 学校体験活動の内容、成果と課題についてレポートを課す。 【取組状況】 活動校での取組状況や日誌の記入状況を評価する。				

（学校体験活動）